

民主的人間・小島先生

川 瀬 謙 一 郎

私にとっての小島先生との最初の出会いはたしか1956年のことであったかと記憶している。日高先生が主唱し小島先生が中心となって進められた民主主義教育哲学の研究計画に手伝いが必要だという話があって、ICUのキャンパスを訪れた時の私は、ICUが何であるかを知らず、また「民主主義」についても疑念を抱いていた。小島先生から、仕事の内容について伺った後食堂へと案内された。食後、食器をまとめて運ぼうとした私に、先生は「自分ののは自分でします」と言われた。このことは、東大の研究室のしきたりに慣れた私にとって目新らしく、強く印象的なできごとであった。本郷のうすぐらい研究室と、ICUの明るいオフィスとの対照は、単に物理的なものに止らない、と私は思うようになった。つづいてお手伝いすることになった研究の過程でも、客気にみちた私にはやや的外れに思われたものもある、反響委員会における批評に対しても、先生は耳を傾け、その意見の長を採ろうとされるのが常であった。この研究の成果が教育研究所から刊行されるころには私は全く洗脳され、民主主義をうけ入れるに至っていたのである。

日ごろ先生から理論的に御指導をうけたのは無論であるが、私にとって最も影響力があったのは、先生の人柄であり、又その日常のふるまいにおけるあらわれであった。一言でいえば、先生は民主主義の研究者であるに止らず、民主主義を生きる人である。デューイのプラグマティズムに価値的方向性の観点から充実を加えようとする研究、また控え目であると同時に懇切周到な御指導は、後進の者にとって貴重な贈物である。感謝と共に、幸い今後も客員教授として指導に当られる先生の御健康をねがってやまないものである。